

## 資本主義の矛盾としての「貧困の発見」

近代社会の成立が社会福祉の誕生につながったことを前回で述べた。貧困者を公的に支える仕組みが充実する根拠の一つとなったのが「貧困の発見」である。資本主義的生産様式と貨幣経済が社会で浸透すると、「働くことができない」ことは、生命の維持に直結する問題となった。19世紀に入り、産業革命によって「世界の工場」となったイギリスでは、その繁栄の一方で、日々の食事にも困る貧困者が多く存在していた。こうした貧困者の実態を調査したのが、1886年から1891年にかけてロンドンで調査をおこなったブース (Booth, C.) と、1899年にヨークで調査をおこなったシーボーム・ラウントリー (Rountree, B. S.) である。

ブースは、ロンドン市民の約30%が貧困状態にあることを明らかにし、その原因が個人の生活習慣によるものではなく、低賃金や不安定就労などの雇用の問題であると指摘した。ラウントリーは、調査に基づき、肉体的生存の維持が困難な状態を「第一次貧困」、突然の出費がなければ肉体的生存を維持できる程度の状態を「第二次貧困」として、貧困線を設定した。その上で、労働者がライフサイクル上で3回は第一次貧困線以下の生活に陥ることを示した。このブースとラウントリーによる2つの貧困調査は、貧困は決して個人の資質や生活習慣の個人の問題ではなく、社会構造上の問題であり、社会的に解決すべき課題であることを明らかにする画期的なものであった。そのため、これは「貧困の発見」と呼ばれる。この「貧困の発見」によって、限定的であった公的救済は拡大し、民間で行われていた慈善活動も法的根拠をもつようになっていった。

## 二度の世界大戦と恐慌

社会福祉の発展は、「貧困の発見」のように資本主義の矛盾への対応として捉えることができる。社会福祉の公的責任を拡大した資本主義の矛盾として挙げられる事象が戦争と恐慌である。

「近代経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスが「神の見えざる手」といったように、資本主義経済では、生産と消費の国家管理がおこなわれなため常に好景気と不景気の波が生じる。繰り返し生まれる不景気を脱するたびに資本主義は修正を加えていくが、資本主義の危機である恐慌が、戦争につながってきたことを歴史は示している。1873年のオーストリアでの株価の大暴落がヨーロッパ各国に影響を与えたのが、最初の本格的な「恐慌」とされている。その恐慌への対応策として保護関税政策が実施され、植民地獲得が激化する。この植民地政策が、結果的に第1次世界大戦につながるとされる。第1次世界大戦後、世界経済の結びつきは強くなる中、1929年にアメリカの株価大暴落から始まったのが世界恐慌であった。世界恐慌は、賠償金問題で苦しむドイツをさらに追い込み、第2次世界大戦につながるナチスドイツ誕生に影響を与えていった。歴史は決して直線的に結びつけることはできないが、一連の流れを踏まえたとき、資本主義の矛盾と

しての戦争と恐慌が浮かび上がってくる。

「社会保障」という言葉が世界で最初に使用されたのは、世界恐慌後のアメリカであった。世界恐慌により失業率が20%を超えたアメリカは、フランクリン・D・ルーズベルト大統領の下で、ニューディール政策と呼ばれる一連の経済復興政策を実施した。ただし、これらの経済政策は応急的なものであったために、アメリカでは1935年に社会保障法 (Social Security Act) が制定され、世界で初めて「社会保障」という言葉が使用される。この社会保障法では、連邦政府が各州に対して老齢年金や、失業保険、公的扶助、母子保健や児童福祉の各福祉サービスに関する補助金を出す画期的なものであった。アメリカは、現在も公的医療保険が限定的で、ヨーロッパ諸国に比べて、社会保障は手厚くないが、そのアメリカでさえ、世界恐慌の影響で、社会福祉を発展させてきたのである。

## ケインズ=ベヴァリッジ型福祉国家

資本主義の必然としての恐慌が、失業による貧困という個人への影響だけでなく、戦争という国家規模の影響をもたらすことへの対応として、両世界大戦期には、イギリスによる失業法や、アメリカの社会保障法といった労働者を保護する法整備が整えられた。この集大成と呼べるのがイギリスのベヴァリッジ (Beveridge, W.) により1942年に発表された「社会保険および関連サービス (ベヴァリッジ報告)」であった。

このベヴァリッジ報告では、「ゆりかごから墓場まで」という国民の生涯生活を国家が総合的に保障する福祉国家への具体的なプランが示された。社会の繁栄は、窮乏、疾病、無知、不潔、怠惰によって阻まれており、これを「5つの巨人」(the Five Giants) とおき、この対応を国家によって実施する「ナショナル・ミニマム」(national minimum: 国民的最低限) の保障を説いた。このベヴァリッジが構想した福祉国家は、ケインズ (Keynes, J. M.) による経済理論に支えられた。ケインズは、失業は、有効需要の不足により発生していることから、国家が有効需要の調整を図ることが必要であると、世界恐慌に対する解決策として、金融政策と財政政策によって完全雇用政策を目指す理論を提示した。ベヴァリッジは、このケインズ理論によって、労働者の雇用が安定し、その雇用を社会保障が後押しすることで、福祉国家が必然的に実現すると考えた。そのため「ケインズ=ベヴァリッジ型福祉国家」とも呼ばれる。このベヴァリッジ報告は、第2次世界大戦後の先進国に大きな影響を与え、戦後の高度経済成長に支えられ、多くの国でナショナル・ミニマムを保障する福祉国家の整備が進むこととなった。

社会福祉の誕生は近代社会の成立から起こり、そして、社会福祉は資本主義が生み出す矛盾への対応の中で発展してきた。現在の国家による社会保障・社会福祉は、二度の世界大戦という悲劇への反省の上にあるともいえよう。その意味で、社会福祉、ソーシャルワークは、資本主義が暴走をしないかを常に監視する役割を持っているのである。